

おおすみくん家で

取り組む SDGs !

実践ガイドブック



おおすみくん家は SDGs を学ぶ・行動する 宝庫です！

1 SDGs の現状

持続可能な開発目標(SDGs)の達成期限まであと5年となっています。

SDGs は全部で 17 目標ありますが、それぞれに小目標となるターゲットが169項目挙げられています。実は、国際的研究組織の報告書によると、2030年に達成可能なターゲットはわずか 16%だそうです※1。そして、世界167国中、日本の SDGs 達成度ランキングは、18 位となっています(同報告書)。我が国の順位をどう評価するかは別として、全世界で取り組んでいる SDGs がこのままでは16%しか達成できない状況に直面しています。

※1 参照:「Sustainable Development Report」(2024)、「持続可能な開発ソリューション・ネットワーク」(SDSN)

行動をさらに加速させなければ、「持続可能ではない地球」が待っていることとなります。それはすなわち、さほど遠くはない5年後の世界がもはや後戻りができなくなるターニングポイントを迎えることとなります。「5年後の世界」は、今の子どもたちが生きる大切な未来です。次の世代に、この素晴らしい地球をバトンタッチするためにも、今こそが正念場かもしれませんし、私たち教育に携わる者にとって ESD(持続可能な開発のための教育)の実践がより真価を発揮する局面に差しかかっていると言えます。

2 今こそ、おおすみくん家で！

おおすみくん家では、様々な団体が利用し、施設内外で活動しています。年齢や肩書き等を問わず、多くの方々が同じ時間、同じ日にそれぞれの活動場所で生活しています。そこで、おおすみくん家の“家”を「地球」、そして一人一人は「地球の一員」と捉えてみてはいかがでしょうか。美しく、棲み心地がよくて、平和で、誰もが平等に輝くことができる“地球”のために、みんなで(個人で)できることは何かを考えて、**行動**してほしいと願っています。SDGs 達成目標年(2030年)が間近に迫っている今だからこそ、集団宿泊学習の機会におおすみくん家で実践してみませんか!!






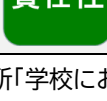
3 「持続可能な社会づくり」の構成概念

そもそも、「SD(Sustainable Development 持続可能な開発)」とはどのようなものでしょうか。1987年「環境と開発に関する世界委員会」(ブルントラント委員会)で、「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」と定義されています。

では、「持続可能な社会※2づくり」とは、どのようなものでしょうか。国立教育政策研究所によると、以下の図にあるようにその構成概念として6つの(多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任性)を例示しています。

※2 Development は「開発」の意ですが、大規模開発や宅地造成等の自然破壊をイメージする人も多くいることから、教育従事者や SDGs 推進者の間では「開発」を「社会」や「発展」の語句に置き換えて、使用することも多くなっています。本ガイドブックも、学習指導要領で使用されている「社会」で極力表記するようにしています。

【持続可能な社会づくりの構成概念(例)】

1 多様性 いろいろある 	自然・文化・社会・経済は、それぞれの形成過程で様々な様相を見せ、多種多様な事物・現象が存在しています。そうした生態学的・文化的・社会的・経済的な多様性を尊重するとともに、自然・文化・社会・経済に関わる事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切です。
2 相互性 かかわり あっている 	自然・文化・社会・経済は、それぞれが互いに働き掛け合うシステムであり、それらの中では物質やエネルギー等が 移動・消費されたり循環したりしています。人は、そうしたシステムとのつながりを持ち、さらにその中で人と人とが互いに関わりあっていることを認識することが大切です。
3 有限性 限りがある 	自然・文化・社会・経済を成り立たせている環境要因や資源(物質やエネルギー)は有限です。このような有限の物質やエネルギーを将来世代のために有効に使用していくことが求められます。また、有限の資源に支えられている社会の発展には限界があることを認識することも大切です。
4 公平性 一人一人 大切に 	持続可能な社会の基盤は、一人一人の良好な生活や健康が、保証・維持・増進されることです。そのためには、人権や生命が尊重され、他者を犠牲にすることなく、権利の保障や恩恵の享受が公平であることが必要で、これらは地域や国を超え、世代を渡って保持されることが大切です。
5 連携性 力を合わせて 	持続可能な社会の構築・維持は、多様な主体の連携・協力がなくては実現しません。意見の異なる場合や利害の対立する場合などにおいても、その状況にしたがって順応したり、寛容な態度で調和を図ったりしながら、互いに協力して問題を解決していくことが大切です。
6 責任性 責任を持って 	持続可能な社会を構築するためには、一人一人がその責任と義務を自覚し、他人任せにするのではなく、自ら進んで行動することが必要です。そのためには、現状を合理的・客観的に把握した上で意思決定し、望ましい将来像に対する責任あるビジョンをもつことが大切です。

【出典】国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究[最終報告書]」(H24)

この6つの構成概念をおおすみくん家での生活や活動において深掘りしてみると、どのような場面で当てはめることができるでしょうか。

この作業によって、SDGs 実践の場面や ESD の可能性が見つかるはずですよ。つまり、おおすみくん家での宿泊学習を“持続可能な社会の創り手”育成として最大限に活かす時間や場にしてみてはいかがでしょうか。

4 集団宿泊学習と持続可能な社会づくり

集団宿泊学習を大きく「4つの場面」で分けると、①入所(出合いのつどい)、②活動(様々な活動プログラム)、③生活(食事、入浴、就寝、起床等の基本的な生活習慣)、④退所(別れのつどい)になります。この4つの場面に、親和性の高そうな構成概念を当てはめてみました。



(1) 「①入所／④退所」における構成概念の捉え方

相互性	入所前には他の利用団体があり、宿泊室や活動場所をきれいに掃除・整理整頓をしてくれています。退所後には新たな利用団体が来て宿泊し、活動を行います。来た時に受け継いだ施設を美しく使用して、次の方々のために引き継ぐ「思いやりのバトンタッチ」をしてください。
連携性	利用中は、他団体も施設内で活動しているかもしれません（宿泊利用・日帰り利用）。お互いに意識して協力し合わなければ、施設では快適な活動や生活はできません。同じ時間・場所を共に過ごしている仲間になります。活動場所を譲り合ったり、困っている方がいたら手助けしたりしながら、お互いに気持ちのよい関係を築いてください。
責任性	誰もが楽しく素敵な宿泊活動をするためには、利用者一人一人の責任ある行動や自覚が必要です。とくに係活動では、自分が任された役割を最後まで責任をもってやり遂げることが大事です。入所時においては、集団内や施設のために個人または班でできることは何かを考え、意識付けられる機会にもなります。退所時においては、責任をもってやり遂げたことを今後どのように生かしていきたいかを意志表明できる機会にもなります。

※6つの構成概念のうち、3つに絞って例示しています。

(2) 「②活動／③生活」における構成概念の捉え方

<p style="text-align: center; background-color: #ff99cc; border-radius: 10px; padding: 5px;">多様性</p>	<p>施設には、様々な団体や県外からの方、国籍の方が利用されています。利用目的も様々です。場合によっては、価値観の違いや文化の違いが見受けられるかもしれません。最低限のルールやマナーを守ることを前提とした上で、お互いの立場を尊重し合っていく必要があります。また、自然豊かな施設環境の中で、多様な植物や生物が生息していること（生物多様性）、地元の地域住民の方々の方が大切に守ってきた自然環境や居住空間であることも踏まえてください。</p>
<p style="text-align: center; background-color: #9933cc; border-radius: 10px; padding: 5px;">有限性</p>	<p>学校や家庭での生活環境と同じく、施設での暮らしでも資源の有限性を意識した行動を心がけてください。水や電気などのエネルギー資源や食料資源が無限に享受できない可能性があることを意識し、動植物の大切な命をいただいてその命を無駄にしないことを改めて考える機会にもなります。また、施設で提供できる活動プログラムの中には、教材（資材）によっては今後、気候変動の影響や資源供給元業者の担い手不足によって提供できないものもあることに直面している現実もあります。</p>
<p style="text-align: center; background-color: #ff0000; border-radius: 10px; padding: 5px;">公平性</p>	<p>施設での活動や生活においては、利用者の誰もが人権を保障されています。一人一人がかけがえのない存在であり大切な命です。また、活動時間や場所も利用団体の活動内容や目的に沿って割り当てられています。施設を利用しているのは、自分たちだけではないことを念頭に行動してください。また、集団内においては個々人の役割や男女の機会均等、ジェンダー平等の視点からの集団活動や生活、係分担を踏まえることも大切です。</p>

※6つの構成概念のうち、3つに絞って例示しています。

5 おおすみくん家は“かけがえのない地球”

子どもたちに、おおすみくん家をひとつの「地球」という視点から、利用の在り方を考えてみてもらってはいかがでしょうか。かけがえのない“地球”を意識し、持続可能な暮らしをしていくにはどのような行動が必要でしょうか。そこで目標として活用できるのが、世界共通の目標である SDGs です。おおすみくん家での様々な場面で、SDGs を念頭にした活動が子どもたちに提案できそうです。（逆に、子どもたちの側から活動の価値を提起してもらえそうです。）

「来た時よりも美しく」は、おおすみくん家でも多くの利用者が団体内で合い言葉のように語ってくださっています。これをSDGs的発想として捉え直すならば、「生まれてきた時(時代)よりも美しく」になります。「美しく」は、「よりよく」という意味合いで考えてもらうとよいでしょう。事前学習の機会に、児童生徒に対して「来た時よりも美しく」という言葉を投げかけておき、施設で活動してもらいます。そして、事後の振り返りでは「生まれてきた時よりも美しく」を披露してみてもどうでしょうか。自分たちが住む地域や学校、そして地球が今よりもっとよくなるためにできることは何なのかを考える発展的な学習へと昇華することでしょう。おおすみくん家だけの行動で終わることなく、身近な生活場面での行動へとつながることになれば、集団宿泊学習も大変価値あるものになります。






6 4つの場面とSDGs

前述した「①入所／②活動／③生活／④退所」の場面で、活用できそうな SDGs を以下に紹介します。(各場面の「捉え方」によって、SDGs 活用例も違ってきます。)

(1) 「①入所」場面(出会いのつどい)における SDGs 活用例

《捉え方》

施設には様々な学校や団体、グループ、家族、国籍の方々が活動しています。その方々は社会的、団体内部的あるいは個人的な目的や考えがあり、施設を利用しています。

<p>10 人や国の不平等をなくそう</p> 	<p>【SDGs10】 人や国の不平等をなくそう</p> <p>年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、あるいは経済的地位その他の状況に関わりなく、共に安心・安全におおすみくん家での生活をしていく際に活用できる目標です。</p>
<p>16 平和と公正をすべての人に</p> 	<p>【SDGs16】 平和と公正をすべての人に</p> <p>あらゆる場所や場面において、利用団体・利用者同士が対立したりいがみ合ったりすることなく、お互いのことを尊重し合いながら一日の生活や一晚を過ごしていくことを考える際に活用できる目標です。</p>
<p>17 パートナーシップで目標を達成しよう</p> 	<p>【SDGs17】 パートナーシップで目標を達成しよう</p> <p>おおすみくん家をつ一つの地球と考えた場合、利用前にここで暮らした団体や人々がいます。先に暮らした団体や人々（過去の人たち）によって“バトンタッチ”された施設を、新たに入所する団体や人々（現在の自分たち）で引き継ぎます。次の団体や人々（未来の人たち）が暮らしやすい施設“地球”のためにも、「時間的なつながり」「人と人とのつながり」「空間（場所）的なつながり」を考える際に活用できる目標です。</p>

※上記の視点はあくまでも例示です。



(2) 「②活動」場面における SDGs 活用例

《捉え方》

施設には様々な活動プログラムがあります。それぞれの活動場面において、その活動の内容や性格に見合った SDGs を見出せます。(活動場面を SDGs の視点で捉え直すだけの簡単な作業によって、様々な SDGs に通じることが再発見できます。)

《人気のある活動プログラム》

- ①野外炊飯 ②ハイキング ③カヌー・ボート ④革細工 ⑤所内オリエンテーリング

<p>2 飢餓をゼロに</p> 	<p>【SDGs2】 飢餓をゼロに</p> <p>全世界で貧困層や幼児を含む脆弱な立場にある人々が、一年中安全かつ栄養のある食料を十分得られていない現実があります。食べ物をいただく時や調理をする時に、思いを馳せる目標になります。</p>
<p>6 安全な水とトイレを世界中に</p> 	<p>【SDGs6】 安全な水とトイレを世界中に</p> <p>世界には、安全で安価な飲料水を享受できていない人々がたくさんいます。また、水不足に悩む国・地域も多くあります。水の大切さや有難さを考えたり、野外調理時に節水を心がけたり、食器洗いの時には排水による汚染のことも気を配れる目標です。</p>
<p>12 つくる責任 つかう責任</p> 	<p>【SDGs12】 つくる責任 つかう責任</p> <p>野外調理時に SDGs 2 や 6 にもリンクさせて考えることができる目標です。活動後に残飯量を確認(見える可)して、食料廃棄(食品ロス)についてみんなで実感することも可能です(焼却処理に伴うエネルギー効率問題にも通じる SDGs 7 にも行き着きます)。また、クラフト活動時には製作物を大切にすることを押さえるのに援用もできる目標です。</p>
<p>14 海の豊かさを守ろう</p> 	<p>【SDGs14】 海の豊かさを守ろう</p> <p>海活動(カヌー・ボート等)の時に活用できる目標です。活動前に、海の美しさや生態系も守るためにどのような姿勢で臨むべきかを考えてはいかががでしょうか。活動後は、清掃活動してみるのも SDGs アクションになります。SDGs15 と抱き合わせて、海の汚染が陸上活動からも多く生じていることにも踏まえるとよいでしょう。</p>
<p>15 陸の豊かさも守ろう</p> 	<p>【SDGs15】 陸の豊かさも守ろう</p> <p>ハイキングやオリエンテーリング活動、キャンプ場での活動、野外炊飯などで活用できる目標です。活動前に、森の美しさや生態系も守るためにどのような姿勢で臨むべきかを考えてはいかががでしょうか。樹木や植物をよく観察すると、葉が細いものや丸いもの、ギザギザのものなどが見つかって生物多様性を実感することができます。管理や手入れの行き届いていない森は荒れ放題になっていて、ゴミの散乱や不法投棄物も目につき、森の豊かさについて考えさせられる機会にもなります。</p>

※上記の視点はあくまでも例示です。



山道に落ちている
ペットボトル



野外炊飯後の残飯

(3) 「③生活」場面における SDGs 活用例

《捉え方》

学校で行っている ESD 活動(SDGs への取組)は、施設での利用時においても実践できます。学校と同じように、おおすみくん家での活動もどこを切っても ESD・SDGs の可能性が見出せます(ホールスクール・アプローチ※3)。さらには、ウェルビーイングの実現に向けたホリスティック・アプローチ※4にもなります。

※3 あらゆる機関と連携しながら、学校全体として持続可能な社会づくりに取り組む手法

※4 問題や課題に対して、全体的な視点から包括的に取り組む手法

《想定される場面》

○班活動 ○食事 ○入浴 ○朝・夕べのつどい(団体紹介) ○清掃

おおすみくん家では、生活場面において“7つの SDGs”に絞って提起しています。



〔館内掲示物〕 おおすみくん家HAPPYアクション7



(4) 「④退所」場面(別れのつどい)における SDGs の視点例

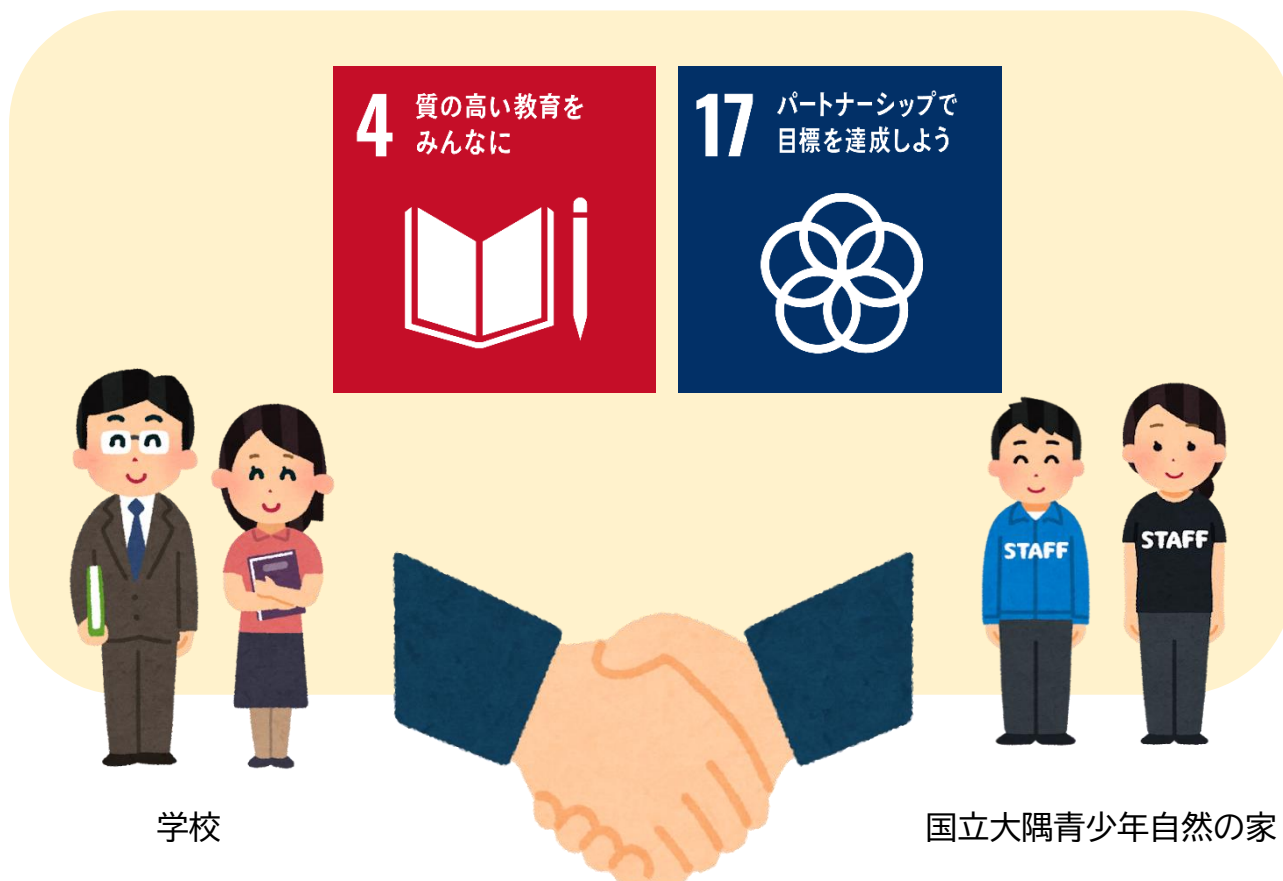
《捉え方》

集団宿泊学習の成果や課題を、学校や家庭、地域に持ち帰ってさらに活かしてもらう励ましの機会となります。子どもたちにとっては、今後の決意表明をする場にもなります。

<p>11 住み続けられるまちづくりを</p> 	<p>【SDGs11】住み続けられるまちづくりを</p> <p>ダイバーシティ（多様性）やインクルージョン（包摂性）を意識した集団づくり、学校づくり、社会づくりをしていく上で援用できる目標です。SDGs 理念「誰一人取り残さない」にも通じてきます。</p>
<p>17 パートナーシップで目標を達成しよう</p> 	<p>【SDGs17】パートナーシップで目標を達成しよう</p> <p>現代的課題の多くは、個人や一集団・組織では解決が難しいです。同じ思いを共有する方々や様々なステークホルダーと手を取り合っていく必要があります。そのためには SDGs の学びの成果を学校内部だけでなく、外部（保護者や地域）にも「発信する」「行動する」ことが重要です。どんな人たちに伝えていくのか、どんな人たちとつながって持続可能な社会づくりに貢献していくのか考えてみましょう。</p>

※上記の視点はあくまでも例示です。

さあ！おおすみくん家で SDGs を実践しましょう！！



7 編集後記

SDGs3は、「GOOD HEALTH AND WELL-BEING(すべての人に健康と福祉を)」です。最近、企業ではこのWELL-BEING(ウェルビーイング)とSDGs8「働きがいも経済成長も」の視点から、仕事を通じて社員の幸せな状態を創出しようとするウェルビーイング経営に乗り出しているようです。ウェルビーイングとは、身体的・精神的・社会的に“良好な状態”であることを示す概念です。単一的で一時的な幸せではなく、複合的で持続的な幸福の意で用いられています。

このウェルビーイングこそ、これからの青少年教育施設が大事にすべき新たな概念であるような気がしています。つまり、利用者も施設職員も“誰も”がウェルビーイングを当たり前のこととする施設です。

新型コロナウイルスによって、人々の行動様式や考え方が大きく変わりました。まさに、SDGs が目指す「社会変革」を先取りするかようなダイナミズムになりました。コロナ禍にあっては、青少年教育施設も従前の「集団」と「非日常」を体験する施設から、「個」と「日常」をも意識するようになりました。

SDGs への行動が“考動”を伴う概念だとすれば、ウェルビーイングは“幸動”と言えそうです。両者が同時並行的に希求されてもよいでしょうし、「考」の行き着く先が「幸」だとすれば、ウェルビーイングはより上位に位置付けられるかもしれません。

「国立大隅青少年自然の家」の英訳は、National Osumi Youth Outdoor Learning Center です。全国にある国立の自然の家・交流の家も、同じように英語では「～ Center」となっています。対外的には「Center」であるのだけでも、敢えて「家」と表記されてあるところに温かな奥ゆかしさを感じられます。これが「センター」とそのまま標記されるのであれば、集団性や非日常性がイメージされる特別な空間や場に映ってしまうかもしれません。

もちろん、日常生活から離れ、自然豊かな場所でリフレッシュを求めて過ごすところに自然の家の価値を見出す利用者もいます。現実社会に戻って、生活や仕事での大きな活力になることは否定しません。しかしながら、自然の家はホテルや旅館と違って教育施設ですからそこでの生活は“旅行”ではなく“研修”になります。したがって、一時的な幸福が得られるだけでは終わらない継続的な教育の視点も必要になります。

そこで、Center が「家」となっている点を踏まえ、子どもたちが自ら住んでいる“家”や普段の日常生活を送っている“学校”と、「自然の家」をシームレスな関係性で捉えてみてはどうでしょうか。すなわち、家から(自然の)家へという着眼です。換言すれば、家庭・学校「生活」⇄施設「生活」という図式です。

学校が自然の家を Center として利用するならば、そこでは集団と非日常の教育的視点になります。家として利用するならば、個と日常を振り返る生活の場になります。あるいは、両者を両立させたホリスティックな教育的利用も考えられます。

本実践ガイドブックで紹介している SDGs は、17目標それぞれを個別に見ていくと実は他の SDGs にも関連している(つながっている)ことに気付きます。つまり、現代的課題の多くは様々な問題が複雑に絡み合っており、包括的に解決していく必要があることから SDGs の学びが大変有効であることが分かります。ここに、ホリスティックな教育的利用の重要性が出てきます。

国連の世界幸福度ランキング(2024年)によると、日本は51位という結果でした※。とくに「他人への寛容さ」や「人生選択の自由度」の項目で評価が低かったようです。また、30歳以下のランキングが73位と低く、若い世代の人生に対する満足度が低下していることが指摘されています。当施設の本部である国立青少年教育振興機構の調査によると、日本の高校生はアメリカ、韓国、中国と比較して自己肯定感が低く、とくに「私は価値ある人間だと思う」「私は今の自分に満足している」では、数値の開きが顕著であるという結果でした。(「高校生の心と体の健康に関する意識調査報告書」2018年) ※2025年版速報では55位に後退

この問題解消のためのアプローチは各論に譲りますが、ウェルビーイングがホリスティックな概念であることからすれば、青少年教育施設での集団宿泊学習も従前の Center 的な利用だけでなく、「家」としての利用視点も新たに加味してみてはいかがでしょうか。個のウェルビーイングが、集団的な関係性において他者をも思いやるハートフルな生活の場としての Center になるかもしれません。

本書では、「おおすみくん家をひとつの“地球”」として見ていただき、SDGs の視点を提案しました(P.4 参照)。おしまい、この視点と大変親和性の高いディズニーランドのアトラクション・テーマソング「小さな世界」(It's a Small World)の歌詞を一部付記します。おおすみくん家をとおして、身近なところ(小さな世界)に様々な SDGs が見出され、行動・考動・幸動していただきますと幸いです。

It's a world of laughter, a world of tears.	笑いの世界 涙の世界
It's a world of hopes, a world of fear.	希望の世界 恐怖の世界
There's so much that we share.	私達はたくさん共有してる
That it's time we're aware.	気づくべき時がきたんだ
It's a small world after all.	結局は小さな世界なんだって

2025年4月 国立大隅青少年自然の家

〔代表執筆者〕 企画指導専門職 上野修司